

林研センターだより 研究・普及情報誌



〔熊本県林業研究・研修センター業務発表会の様子〕

目次

○林研センターからの情報	P 1
<ul style="list-style-type: none"> ・今あるデータから将来を予測する ・スギエリートツリー・特定母樹及びセンダンの立地条件に関する研究 ・ヒノキ大径材の新たな利用方法 ・急峻な山地に必要な林業技術 ・災害に強い作業道の作り方 ・チェーンソーを安全に使うための第一歩 	
○林業普及最前線（各普及指導区の実績）	P 8
<ul style="list-style-type: none"> ・夏季ミツマタ収穫検証（宇城） ・かみましき林業担い手連携会議を開催（上益城） ・きくち竹資源ネットワーク交流会を開催（続報）（菊池） ・将来の林業担い手の確保に向けて（玉名） ・森林・木工教室の開催（県建設業協会熊本支部と連携）（鹿本） ・スギ苗木生産体制の強化への取組み（阿蘇） ・自伐型林家等に向けた研修を実施（八代） ・高校生を対象とした各種研修会の取組み（芦北） ・森林環境譲与税を活用した森林経営管理制度推進に係る市町村支援の取組み（球磨） ・シカ被害の未然防止に向けた取組み（天草） 	
○特集	P13
<ul style="list-style-type: none"> ・森林経営管理法（森林経営管理制度）の一部改正について（森林整備課） ・「くまもと県産木材炭素貯蔵量認証制度」の創設～木材利用の効果の「見える化」～（林業振興課） ・第72回全国乾椎茸品評会（林業振興課） ・女性担い手の活動～くまもと林業大学校卒業生の活躍～（林業振興課） ・「くまもと森林フェスティバル」を開催しました！（森林保全課） 	
○受賞報告	P19
<ul style="list-style-type: none"> ・「全林試協 第38回研究功績賞」受賞 	

今あるデータから将来を予測する ～ヒノキ成長の早期検定～

試験の背景と内容

林業研究・研修センターでは、県内の植栽に適した、スギやヒノキの品種開発を行っています。

スギやヒノキの品種開発には長い年月がかかり、成長量だけを考えた場合でも標準伐期まで調査を行い、成長に優れたクローンや個体を選抜するのが一般的でした。

筆者と同年代より上の方は覚えていらっしゃるかもしれませんが、かつて、遺伝的に優れたスギやヒノキのクローンや、家系を選ぶための「次代検定林」という試験林が、県内に35箇所ほど設定されていました。

次代検定林は熊本県内だけではなく全国各地に設定されているのですが、スギについては九州内の次代検定林に植栽された12クローンの成長量データを利用した研究が国において行われた結果、5年生時の樹高と30年生時の樹高に関係が認められ(倉本・佐藤 2008)、早期に成長が早い品種を開発できる可能性が示されています。

今回は筆者が旧林業研究指導所在職時に、ヒノキで同様に早期に成長が早い品種を開発できないか取り組んだ研究についてご紹介します。

研究は平成19年度から平成21年度に行い、その当時、30年生時の成長量調査が終了していた県内8箇所の次代検定林内に共通して植栽されている5家系について、5年生時の樹高と30年生時の樹高に関連性があるかを調査しました。なお、ヒノキはさし木が難しいとされているため、各次代検定林には採種母樹由来の種から育苗した苗木が植栽されています。

調査の結果、5年生時の樹高と30年生時の樹高には関連性があり、5年生時に樹高が高い家系は30年生時でも樹高が高い傾向がありました(別図)。この結果、早期に樹高成長が早い品種を選べる可能性があることが明らかになりました。

筆者は、森林整備課の育種担当者として、また、地域振興局の調査担当者、旧林業研究指導所の研究担当者として、それぞれの立場で次代検定林調査に携わったことがあります。調査本数が多く、大変苦労したことを覚えています。また、森林整備課や地域振興局の担当者からも次代検定林の調査は多くの手間がかかるため、やや敬遠される雰囲気であったことを記憶しています。

しかしながら、調査を継続したことでヒノキの品種開発のための期間が大幅に短縮できる可能性が示されており、各立場で携わっていただいた方のご苦労が報われたのではないかと思います。

改めて関係者にお礼を申し上げるとともに、この研究に限ったことではありませんが、公立試験研究機関としては、新しい成果が得られた時には随時情報を発信していくことが必要だと考えます。

これらの調査結果は、当センターが取り組んでいる熊本県原産ヒノキさし木在来品種「ナンゴウヒ」の交配や、交配した候補木の選抜の基礎データとしても活用しています。

また、今後は過去に当センターが取り組んだ研究データを生かしながら、研究成果の速やかな社会実装に向けて、センターを挙げて取り組んでいくこととしています。

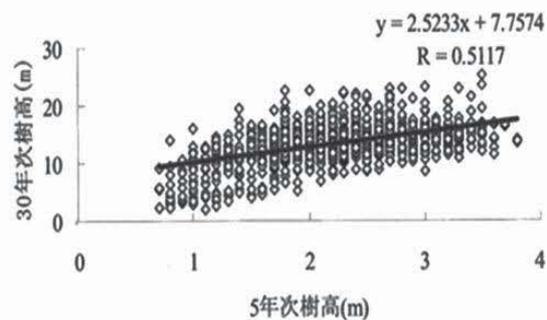


図 5年生と30年生時の樹高の相関図



写真 ヒノキ採穂状況

引用文献：倉本哲嗣・佐藤新一 (2008)
林木の育種特別号 5-7

〔育林環境部 草野 僚一〕

スギエリートツリー・特定母樹及びセンダンの立地条件に関する研究

(令和7年度～令和11年度)

1 試験の背景と内容

(1) スギエリートツリー・特定母樹

(以下、エリートツリー等)の立地条件調査

熊本県の再造林率は近年7割程度で推移しており、再造林の推進や育林費用の低減のためにも、成長が早いエリートツリー等の活用が必要です。

一方で、エリートツリー等は土壤水分や養分等の要求度が高く、地位が高くない林分においては成長が悪くなるという報告もありますが、詳細は不明であり、造林者からはどのような品種をどのような場所に植栽すれば良いか等の相談が寄せられています。

このため、当センターでは県内5箇所(水俣市、山鹿市、天草市、南小国町、水上村)にエリートツリー等を植栽した試験地を設定し、成長量調査に取り組んでいます。

(2) 得苗率や発根率の高いエリートツリー等の選定

エリートツリー等の苗木生産について、得苗率や発根率がクローンによって大きく異なるとの相談が苗木生産者から寄せられていることに加え、エリートツリーであっても雄花着花量が多いとの相談もあります。

このため、当センターではエリートツリー等の穂木を用いて露地さし試験とMCコンテナ苗への直さし試験を実施し、得苗率や発根率のデータ収集を行うこととしています。

また、併せて菊陽苗畑内に試験地を設定し、エリートツリーの雄花着花性調査も行うこととしています。

(3) センダンの成長に与える要因調査

センダンの育成適地は標高500m以下の日当たりの良い場所等とされていますが、植栽後、生育の良くない造林地も見受けられ、より詳細な適地の情報が必要となっています。

このため、当センターでは県内のセンダン造林地について現地調査を行い、センダンの成長に与える要因調査を行うこととしています。

また、併せて舞の原試験展示園内の試験木を用いて樹幹解析を行い、短伐期で収穫することを念頭においた、10～20年生の詳細な成長過程を明らかにすることとしています。

2 今後の取組み

(1) エリートツリー等の立地条件調査

令和11年度まで、各試験地の初期5年間の成長量調査を実施し、各地域における初期成長量の優れたエリートツリー等を選定することとしています。



写真1 山鹿市に設定した試験地

(2) 得苗率や発根率の高いエリートツリー等の選定

令和8年度までに露地さし試験とMCコンテナ苗への直さし試験を実施し、得られたデータを分析することで、品種毎の得苗率や発根率を明らかにすることとしています。

また、令和8年度まで雄花着花量の調査を行い、エリートツリーの雄花着花性を明らかにすることとしています。



写真2 試験中のMCコンテナ苗

(3) センダンの成長に与える要因調査

令和8年度においてセンダンの樹幹解析を実施し、センダンの詳細な成長過程を明らかにするとともに、令和9年度までにセンダンの造林地調査を実施し、センダンの成長に与える要因を明らかにすることとしています。

〔育林環境部 岩本 鷹洋〕

ヒノキ大径材の新たな利用方法

熊本県内の人工林は高齢級化が進み、ヒノキでは、蓄積量が11齢級（51～55年生）の779万 m^3 をピークに11齢級以上が2,689万 m^3 と総蓄積量3,675万 m^3 の73%を占めています。

そこで、ヒノキ大径材の新たな利用方法として、枠組壁工法構造用製材及び幅広・厚板を利用した現し床の強度性能を検証しました。

1 枠組壁工法構造用製材

(1) はじめに

枠組壁工法構造用製材は、いわゆる2×4（ツーバイフォー）工法住宅に使用される部材です。

最近では、スタッドと呼ばれる断面の小さな縦枠材にスギが使われる事例も見られるようになりましたが、部材の主流は北米産のSPF（JAS目視等級区分2級）です。特に床根太などの強度を要する部分に使用される断面の大きな2×10材（断面寸法38mm×235mm）はその傾向にあります。そこで、ヒノキ材がSPFの代替材になり得るかを検証するため、ヒノキ2×10材の強度をSPFと比較しました。

(2) 試験の概要

県内の製材所において、ヒノキ大径材10本（末口径43.0cm～50.3cm）から1本あたり5枚、合計50枚の原板（厚さ45mm、幅250mm、長さ4m）を採取し20%以下まで人工乾燥したのち、2×10材のサイズ（厚さ38mm、幅235mm）に仕上げ加工し、枠組壁工法構造用製材のJAS基準により目視等級区分を実施し、特級から規格外まで5段階の格付けをしました。その後、当センターの実大曲げ試験機にて曲げ試験（写真1）を実施しヒノキ2×10材のヤング率を算出しました。

(3) 結果・考察

目視等級区分の結果を図1に示すと、2级以上が50枚中37枚（74%）でした。ヒノキのJAS目視等級区分2級の曲げヤング係数は9.9 kN/mm^2 のため、SPFのJAS目視等級区分2級の曲げヤング係数9.6 kN/mm^2 を上回っており、ヒノキ

大径材からはおおむね7割程度の割合でSPFと同等以上の強度がある2×10材が生産できることが分かりました。

次に、曲げ試験の結果を図2に示します。縦軸に曲げヤング係数、横軸に実測した曲げヤング係数の値が小さいヒノキ2×10材を左側から順に並べたグラフです。ヒノキ2×10材の曲げヤング係数とSPFのJAS目視等級区分2級の曲げヤング係数9.6 kN/mm^2 を比べると、50枚中45枚（90%）でヒノキの方が上回っており、ヒノキ大径材からはおおむね9割程度の割合でSPFと同等以上の強度がある2×10材が生産できることが分かりました。

これらのことから、ヒノキ大径材から採取した2×10材の多くはSPFの代替になり得ることが裏付けられるとともに、目視等級区分よりも強度を実測する機械等級区分の方がより有利であることが推測されました。



写真1 曲げ試験の実施状況

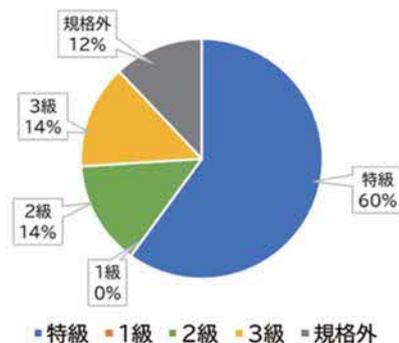


図1 目視等級区分の結果

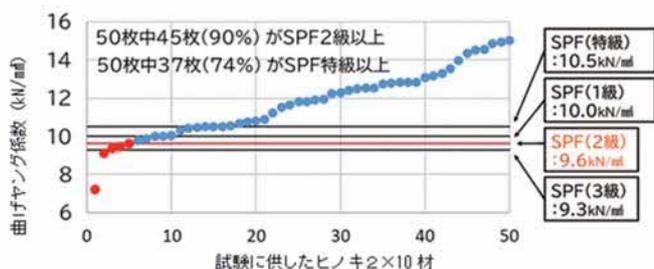


図2 ヒノキ2×10材の曲げヤング係数分布

2 幅広・厚板を利用した現し床

(1) はじめに

ヒノキの大径材からは、これまで採材できなかった幅広な厚板が採材可能です。また、大径材の樹皮側からは見た目の美しい良質な板材が期待できます。そこで、根太やフローリング材を省略した施工性の良い現し床に、ヒノキ大径材から採材した幅広・厚板を利用することを目的にその実用性を検証しました。

(2) 試験の概要

強度試験は、人工乾燥した板幅3種類（180、240、300mm）、厚さ30mm、長さ1.9mのヒノキの幅広厚板と断面寸法105×105mmのヒノキ枠組材により高さ2.85m、幅1.9mの床構面を各1体作製し当センターの面内せん断試験装置を用いて実施しました（写真2）。なお、幅広厚板は床構面の中央部になるにつれ密度が大きくなるように配置し、太め鉄丸釘CN75釘を60mm間隔で枠組材に留め付けました。枠組材の接合部は大入れ蟻掛けとしました。また、各部材は全て機械等級区分E110のヒノキ丸太から製材しました。

(3) 結果・考察

図3のとおり、板幅を広くすると見かけのせん断変形角の大きさに応じて荷重も大きくなりました。つまり板幅を広くすると床の強度性能を示す許容せん断耐力（床倍率）は向上しました。床倍率は板幅180mmで0.50倍、240mmで0.76倍、300mmで1.11倍でした。これは、国土交通省告示に示される板材を用いた一般的な床構面（根太間隔340mm以下、鉄丸釘N50@150mm、板材：厚さ12mm、幅180mm以上）の床倍率0.3倍、あるいは合板を用いた床構面（根太間隔500mm以下、鉄丸釘N50@150mm、面材：厚

さ12mm以上）の0.7倍と比較しても十分な強度を有しており、実用性があることが分かりました。

なお、参考までに表1のとおり、当センターで以前実施したスギによる同様の試験結果と比較すると比強度（ヒノキ床倍率/スギ床倍率）は板幅を広くするにつれ、1.02、1.10、1.29と徐々に大きくなることから、ヒノキの方が板幅を広くする効果が大きいことを付記します。



写真2 強度試験の実施状況

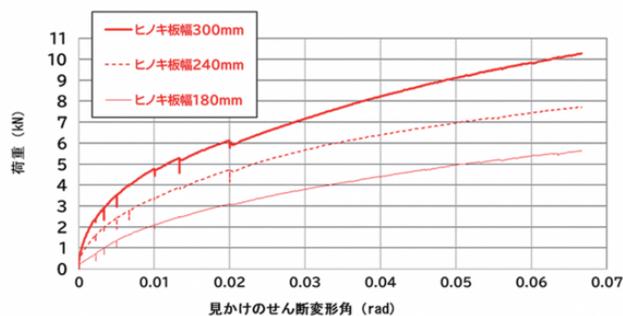


図3 荷重と見かけのせん断変形角から作製した包絡線

表1 樹種別の床倍率及び比強度

【床倍率の単位：倍】

	板幅180mm	板幅240mm	板幅300mm
ヒノキ	0.50	0.76	1.11
スギ	0.49	0.69	0.86
(ヒノキ/スギ)	(1.02)	(1.10)	(1.29)

〔林産加工部 徳丸 善浩〕

急峻な山地で必要な林業技術 ～林業架線作業主任者講習～

1 林業架線作業主任者免許とは

林業では多様な機械や道具を扱うため、作業内容に応じて「安全衛生教育」「特別教育」「技能講習」「免許」といった区分の資格が求められます。なかでも林業架線作業主任者免許は、伐採した木材を山奥から搬出する際に用いるワイヤーロープや滑車などを安全に運用するための国家資格です。具体的には、機械集材装置やワイヤーロープの設置・解体といった危険性の高い作業に必要とされ、免許取得者は機械の構造や荷重のかかり方、事故防止のルールを理解したうえで、現場の安全管理や作業手順の指示を担います。

そのため、山林での木材搬出を安全かつ効率的に進める上で欠かせない重要な資格といえます。

2 講習について

林業研究・研修センターでは、令和7年8月19日から9月5日にかけて、林業架線作業主任者講習を実施しました。学科50時間・実技50時間の合計100時間にわたる講習で、修了試験に合格した受講者には修了証を交付しています。

学科講習では使用する機具の名称や特徴、策張り方式、機械集材装置の組立・解体、力学、関係法令など現場で必要となる基礎知識を学び、実技講習では集材装置の操作をはじめワイヤーロープや滑車

類の取扱い、木材を空中に吊ったまま移動させる搬器の設置、さらに4mほどの丸太を支柱として組み上げ、ワイヤーロープを張る「策張り」など、受講者が実際に作業しながら技術を習得しました。

また、当センター職員も策張り作業の工程を間近で見学し、日頃の業務では得られない貴重な学びを得ることができ、夏の暑さが残る中での14日間ではありましたが、受講者・職員ともに大きな怪我もなく全日程を無事に終えることができました。

3 免許取得について

当センターで実施した「林業架線作業主任者講習」を修了し、あわせて林業の架線作業に関する実務経験が2年以上ある方は、必要書類（免許申請書、林業架線作業従事者証明書、免許証送付用封筒・本人確認書類・切手、本講習修了証）を労働局へ提出することで免許を取得できます。

過去に本講習を修了され、まだ申請がお済みでない方は、この機会に手続きを進めてください。

なお、令和8年度も同講習の実施を予定していますので受講を希望される方や詳細を知りたい方はどうぞお気軽に林業研究・研修センター企画研修部（096-339-2222）にお問い合わせください。最後に、本講習実施にあたり学科を担当いただいた吉田講師、実技を担当いただいた増田講師、第一索道商事株式会社の中村講師に御礼申し上げます。



学科講習の様子



実技講習の様子

〔企画研修部 杉村 悠輔〕

災害に強い作業道の作り方 ～林地保全に配慮した道づくり研修～

1 林地保全に配慮した道づくり研修について

森林作業道の作設にあたり、ICT等の先端技術を活用した効率的な生産システムを学ぶとともに、地形・地質や雨水処理を踏まえた災害に強い作業道整備を行える高度な現場技能者の育成を目的として、令和7年12月23日から25日にかけて山都町中央公民館（座学）及び矢部高校鍛冶床実習林（実技）を会場に研修を実施しました。

2 座学研修の内容

1日目の午前中は、まず当センターから作業道開設における基礎的な留意事項、県が作成した森林所有者および林業者向けの「林地保全に配慮した林業のガイドライン」について説明を行いました。

続いて、外部講師から「G空間情報とICTを利用した施業の効率化について」と題した講義が行われ、航空レーザー計測で得られたデータを活用した作業道ルート選定の事例や、関連ソフトで出力された図面を用いて急傾斜地など道づくりに不適な箇所を把握する方法、さらにスマート林業につながる作業効率化の取組事例や関連する機械・アプリ等のツール紹介など、多岐にわたる内容が紹介されました。なお、講義の冒頭にはアイスブレイクが実施され、参加者同士の雰囲気や和らいだ中で研修が進められました。



座学研修の様子

3 実技研修の内容

1日目の午後からは座学と別の外部講師となり、実習林へ移動し図面を基に打合せを行ったのち、森



実技研修の様子

林作業道の開設のルート選定を実施しました。今回は下草の繁茂が少なかったため、起点側から終点側まで比較的に見通しが良く、ルート選定は円滑に進みました。選定後はバックホウで掘り進める際に支障となる立木を伐採し、伐採木を既設の作業道へバックホウで引き込んで玉切り作業を行い、道脇へ集積しました。幅およそ3mの限られたスペースでバックホウを操作しながら材を集積する作業でしたが、受講者は手慣れた様子で取り組んでいました。

2日目は、引き続き立木の伐倒・集積作業を行うとともに、伐倒後の根株を活用したのり面を補強する作業を実施しました。バックホウのバケットを細かく操作し、掘り取った根株の根の長い側が斜面上側となるよう据え付ける作業で、1日目以上に高度な技術が求められたため、受講者も苦戦しながら取り組んでいました。

3日目は、前日までに伐倒した木の玉切りなどの整理作業を行った後、降雨時の流水による道の崩壊を防ぐための横断溝を作設し、その施工上のポイントを確認しました。

研修期間中天候が崩れる場面もありましたが大きな怪我もなく研修を終えることができました。

最後に、本研修実施にあたり座学を担当いただいたくま中央森林組合の眞鍋講師、実技を担当いただいた大林業株式会社永田講師に御礼申し上げます。

〔企画研修部 杉村 悠輔〕

チェーンソーを安全に使うための第一歩 ～初心者向けチェーンソー研修～



〔令和7年（2025年）11月24日 於：熊本県林業研究・研修センター〕

「チェーンソーをこれから入手して使いたい」、「林業用等として専門的に使用してはいないが取扱い方法を習いたい」、「将来的には林業への就業も考えているが手始めにチェーンソーについて知りたい」などの要望をお持ちのチェーンソーの初心者を対象に、安全作業への認識を深めていただくための研修会を開催し、20人の方に参加いただきました。

午前は、まず当センターからチェーンソーの種類別の特徴、構造の基礎知識、取り扱う上で初心者が気づきにくい点などについて説明を行いました。続いて外部講師からチェーンソーの日常的な分解・組立の手順、消耗部品の交換の必要性などについて説明がありました。

午後は、チェーンソーの整備と伐木の実技を実施しました。整備は外部講師と当センターで担当し、参加者各人の整備作業の巡回指導・質問対応などを行いました。伐木の実技は当センターが担当し、チャップス等の安全装備の装着、始動と停止方法、チェーンブレイキ操作、丸太の水平垂直切り、受口・追口の作り方等の指導を行いました。

研修終了後は、参加者にアンケート調査を行いました。チェーンソーの概要と伐木の実技については

時間・内容ともに60～80%の方が良い評価をされましたが、チェーンソーの整備については「時間が短い」、「内容をもっと詳しく」との評価が多くありました。

また、ソーチェーンの目立て作業が行えるよう準備していましたが、持参されたチェーンソーには長期間清掃されていないものもあり、この作業に終始する人が多く見られました。アンケートの回答と併せ、この事は初心者の方にとっては通常の分解組立さえもハードルが高いことを示していると思われる。講師も日常的な清掃の重要性を特に強調されていたので、今回、参加者にもその認識が深まったと思われる。

なお、参加者の感想では「チェーンソーのみでなく草刈り機などに応用できる。学んだ事を実践の場で活用したい」、「大変勉強になりました。今後の生活に役立てたい。」などの意見があり、今回の研修を通してチェーンソーを持っている人達の、学習する機会へのニーズの高さが改めて分かりました。

最後に本研修実施にあたりご支援いただきました有限会社マルユーの中丸講師、宇城地域振興局林務課に御礼申し上げます。



チェーンソー取扱いの概要説明



整備の仕方の講義



整備の仕方の実習



伐木実技

〔企画研修部 園田 太志〕

林業普及最前線

宇城普及指導区

～夏季ミツマタ収穫検証～

昨年度から宇城普及指導区では、美里林研が取り組んでいる自生ミツマタを活用した和紙原料の生産活動の支援を行っています。

今回の支援内容は、以下のとおり検証を行いました。

- ・夏季（水分吸上げ時期）の樹皮収穫について
 - ・参加者：美里林研会員 3名 普及指導員 3名
 - ・実施日：令和7年6月30日
 - ・場 所：美里林研会員の所有林
- 検証① 枝の採取方法について
結果：剪定鋏で容易に収穫可能。
- 検証② 樹皮剥きについて
結果：切込みを入れて容易に剥ぎ取れた。
- 検証③ 樹皮の黒皮除去について
結果：黒皮は樹皮の繊維質が強く、白皮にするのが難しかった。

このほか、新芽の挿し木を行いました。結果は活着しませんでした。この結果は、令和7年9月18日美里町中央公民館でミツマタ生産に参加される会員さんに報告いたしました。

今後の活動内容としては、冬季の樹皮収穫についての検証を行う予定です。

〔村上 太助〕



上益城普及指導区

～かみましき林業担い手連携会議を開催～

上益城普及指導区では、森林経営管理制度や森林環境譲与税関連事業の推進、林業担い手の確保をはじめとした様々な課題に対応するため、上益城地域の自治体や林業事業体が協議する場として、令和元年度から「かみましき林業担い手連携会議」を開催しています。

今年度は、林業事業体の管理職員向けの労働安全対策研修と林業事業体を紹介するパンフレット作成等について話し合いました。

会議では、労働安全衛生規則は最低限の安全基準であり、労働者の安全を確保するには企業の努力が不可欠であること、事故が発生した場合の会社や経営者の責任・保障等の対応状況を説明しました。グループワークでは林業普及指導員等がファシリテーターとなり、各林業事業体の労働安全対策の内容等、活発な意見交換を行いました。

パンフレット作成では、就業ガイダンスや各種イベントにおいて、上益城林業事業体の魅力等の発信ツールとして活用できるよう構成・内容を検討していくこととなりました。

今後の担い手連携会議のテーマについて、鳥獣対策、伐造届、所有者不明森林の対処方法、森林ゾーニング、苗木、外国人労働者活用などを求める意見があったことから、今後も地域の林業担い手の確保や定着、様々な課題解決に向けて、自治体と林業事業体が連携していく取組みとして継続していきます。

〔小嶋 研二郎〕



菊池地域では、放置竹林対策の一環として地域の竹資源活用に向けた官民学の交流会を昨年度から開催しており、今年度はメンマの商品化を主軸に引き続き開催しました。

今回は、まず、菊池産メンマの商品化に取り組む女性林業者グループから、交流会の成果としてこれまで課題であった「原料調達不安定さ」が、関係者間の情報共有と原料相互融通などにより安定調達に繋がったこと、さらに加工所の開設や試作品製造の後押しに繋がったことなどが報告されました。

次に、試作された5種類の味付けメンマを参加者全員で試食し美味しさを堪能する中、その風味や食感に様々な意見が寄せられました。

その後、グループワークにより参加者が課題毎に回遊するラウンドテーブル方式で意見交換を行い、「販路拡大」「商品開発」「PRとブランディング」について、今後の進展に繋がる提案が多数出されました。

引き続き、林業普及指導員が各連携主体のハブとなり、情報共有や技術支援、マッチングなどを通じて菊池産メンマの本格的な商品化や販路拡大などを後押ししていきます。



〔岩上 博紀〕

玉名地域森林・林業振興協議会（林業普及・林研グループ部会）では、令和7年（2025年）11月13日（木）に、和水町の玉名森林組合及び間伐作業実施中の現地において、県立北稜高校の間伐実習を開催しました。

当日は、造園科の2年生4名を対象に、午前には森林・林業に関する座学を実施し、午後からチェーンソーの基礎操作や玉切り体験、林業機械（フォワーダ）操作体験、更にはツリークライミング体験を行いました。

座学では、昨年度（1年生時）に林業講座を実施し、森林・林業に関する基礎的な内容を講義したため、今回はより専門的な内容について林業普及指導員が説明しました。

現地実習では、玉名森林組合及び青年林業士の協力を得て、十分な安全対策のうえ、これら3つの体験を行いました。

本実習は令和2年度から実施し、今回で6回目を迎えました。先生方や生徒から好評を得ており、来年度以降もより多くの生徒が林業に興味を持てるよう、継続して実施していきます。



〔松野 雄三〕

鹿本普及指導区

～森林・木工教室の開催（県建設業協会鹿本支部と連携）～

鹿本普及指導区では、春期から関係者との調整を行い、鹿本地域木材需要拡大推進協議会（事務局：鹿本地域振興局林務課）と県建設業協会鹿本支部が連携した森林・木工教室を、令和7年11～12月に「山鹿市立八幡小学校」と「めのだけ小学校」の5年生児童を対象に開催しました。

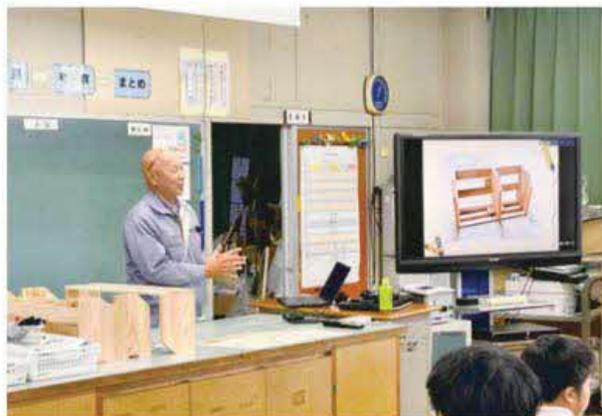
森林教室では、林業普及指導員から森林の働きや熊本の林業について、建設業協会の方からは災害から森林を守るための治山工事について説明を行いました。

木工教室では、児童に木の良さを身近に感じて貰うため、地元製材所で加工した山鹿市産スギ材を使った本棚の制作体験を行いました。

本取組みは、林業普及指導員と共に、現場で働かれている建設業協会の方から直接話を聞くことができる貴重な体験の場となり、教諭や児童からは好評でした。

今後も、多くの児童に森林・林業に興味・関心を持って貰えるような取組みを地域の関係者と連携しながら広がってほしいと思います。

〔野口 琢郎〕



建設業協会員による森林教室



めのだけ小学校5年生児童

阿蘇普及指導区

～スギ苗木生産体制の強化への取組み～

阿蘇管内では、新規に苗木生産に取り組む方が増えてきており、今後、花粉の少ないスギ品種や特定母樹由来の苗木増産が期待されています。

そのような中、令和6年度に阿蘇管内の苗木生産事業者2名が、林業研究・研修センター配付のスギ苗木（県下益城1号等）を受領し、採穂園を造成しました。成長を確認していたところ、令和7年4月に入り、両事業者から「配付を受けた苗木に枯れが発生した」との連絡がありました。

林業普及指導員が現地を確認したところ、苗木の片側（主に朝日の当たる側）に変色が見られるものが多く、3月の遅霜による霜焼けのような状態と推察されました。

7～9月に再確認したところ、幸いなことに緑の部分が増えていて、回復傾向を確認できましたが、今期は回復するのが精一杯で、あまり成長できなかったようです。

秋に草刈りをした際、苗木の根元に少し草を残していれば、霜焼けを防止できたのかもしれませんが。

次の春からはスクスク成長してくれることを期待しています。

〔松井 由佳里〕



4月 片面だけ変色



7月 回復傾向が見られた苗木

県南広域本部管内では、自伐型林家や自伐型林業推進のため、地域おこし協力隊を採用している自治体からの研修依頼が増えています。担い手の確保が課題となる中、多様な担い手を確保していくことは、持続的な林業経営のためにも重要であることから、林業普及指導員が中心となり、今年度もQGISや労働安全衛生に関する研修をこれまで計4回実施しました。

近年、森林計画図や登記所備付地図などのオープンデータ化が進み、GISを活用しやすい環境が整ってきたこともあり、研修の中でも特にQGISに関する研修の機会が多くなっていますので、今回はその内容についてご紹介します。

研修では、最初に森林簿の見方やデータの入手方法等について説明した後に、演習として伐造届に添付する図面の作成を行うなど、できるだけ実務に沿った内容としています。受講者からは「実際に操作することで理解が進んだ。」などの感想があり、概ね好評であったものの、「一度に覚えることは難しい。」との意見もあったため、フォローアップのための研修も企画していきたいと思えます。

今後も、地域の実情に応じた担い手を育成できるよう、最新の法令や知見を取り入れながら、普及指導業務に取り組んで参ります。

〔塩崎 雄理〕



令和2年7月に発生した豪雨災害からの復旧状況の周知や防災意識の醸成を目的として、治山工事現場に芦北高校生を案内しました。当日は治山事業の意義・役割について説明したうえで、施工状況の見学や木製型枠の製作にも挑戦してもらいました。今回の見学会は、関係者の協力により、生徒が森林土木工事を体感できる貴重な機会となりました。災害復旧に必要な森林土木工事への理解を深め、より身近に感じていただければ幸いです。

当指導区では、芦北高校生を対象に間伐及び高性能林業機械操作の実践研修を平成25年以降毎年実施しています。この研修は林業の知識や技術を教示するだけではなく、私たち林業普及指導員が高校と交流することで、森林・林業そして山村地域の魅力や課題を共有することができる貴重な機会と捉え、継続している取組みです。「高性能林業機械の操作が楽しかったのでまた研修してほしい。」「クレーンゲームみたいで楽しかった。」「機械操作には意外とすぐ慣れた。他の機械も動かしてみたい。」等、好評で特にプロセッサの操作に関心を持つ生徒が多く、林業を将来の職業の選択肢の一つとして興味を持ってもらえることを期待しています。

今後も、若手林業担い手の確保・育成は重要課題と捉えており、地域の関係業界や行政、学校関係者と連携しながら、課題解決に向けて取り組んで参ります。

〔石坂 泰扶〕



治山工事現場見学会
(令和7年7月)



間伐、高性能林業機械操作実践研修
(令和7年9月)

球磨普及指導区

～森林環境譲与税を活用した森林経営管理制度推進に係る市町村支援の取組み～

森林環境譲与税を活用した森林経営管理制度の推進については、林業普及指導員が中心となり取組みを行ってきたところですが、令和6年度末の管内累計譲与税の事業化割合は、71%に留まっている状況でした。

そこで、令和6年度に引き続き、森林経営管理制度及び森林環境譲与税意見交換会を開催して、森林経営管理制度実施状況の詳細を把握し、森林環境譲与税の用途については、令和8年度事業化に繋がるよう具体的事例で情報共有を行いました。

また、森林環境譲与税事業化割合の進捗低位市町村については、森林経営管理サポートセンターと連携して課題を洗い出し、解決方法のアドバイスをを行いました。

さらに、特に進捗が遅れている市町村を重点支援市町村に選定し、市町村の実情に応じた理解醸成をはじめ、森林整備までの具体的な方法・手順作成等の支援を行い、森林経営管理制度の進捗アップを目指しました。

今後もこれらの活動を継続し、森林経営管理制度及び森林環境譲与税の適切な運用に向け支援したいと思います。

〔平生 一広〕



重点支援市町村打合せ会議

天草普及指導区

～シカ被害の未然防止に向けた取組み～

天草管内では、野生のニホンジカは生息していないと長年言われてきましたが、平成27年以降、雄ジカが目撃されるようになり、現在では年間平均約9件の目撃情報が寄せられている状況です。

シカによる森林被害は、植栽木の食害や立木の皮剥ぎ、下層植生の消失による土砂流出など非常に深刻となることから、令和6年度に林業普及指導員が天草管内のシカ目撃情報を収集するためのプラットフォームを構築し、幅広く情報を集める体制を整えました。

こうした状況を踏まえ、令和7年7月に、天草管内11会場で開催された天草地域森林組合の地区別説明会に林業普及指導員4名が分担して同席し、各地区の組合員へシカ被害の未然防止の重要性や目撃情報の提供を働き掛けました。

今後もシカ被害の未然防止の取組みを継続していきますので、天草管内でシカを目撃された際は、情報のご提供をよろしくお願いいたします。



シカ目撃情報



入力フォーム

〔入口 真行〕

森林経営管理法（森林経営管理制度）の一部改正について

1 森林経営管理制度の概要

森林経営管理制度は、市町村が運用主体となって、森林所有者による経営管理が困難な森林を集約化し、収益の確保が期待できる森林については林業事業体に経営を委ね、収益が見込めない森林については市町村が自ら管理を行うという制度です。

本制度は令和元年度から施行され、県におきましては相談窓口の設置や巡回指導、令和3年度からのサポートセンターの設置等を通じ、市町村の制度運用を支援して参りました。

令和6年度末現在、森林所有者への今後の森林管理に関する意向調査が43市町村で進められており、森林所有者の委託を受けて森林整備を実施するための権利設定等が21市町村で行われ、18市町村において406haの森林整備が実施されたところです。

サポートセンターによる支援状況



巡回指導状況



現地指導状況

2 森林経営管理法の改正内容

令和7年5月に成立した森林経営管理法の一部改正においては、市町村のマンパワー不足や、市町村に経営管理を委ねたい森林が小規模分散であること、市町村や林業経営体への権利設定に時間を要することなどの全国的な課題を踏まえ、市町村の事務を支援する法人（経営管理支援法人）の指定制度の創設や、集約化構想の作成に伴う林業経営体への森林の経営管理に関する権利設定を迅速に行う仕組み（権利集積配分一括計画）の措置等がなされ、令和8年4月1日に施行されることとなっています。

具体的には、経営管理支援法人の指定制度の創設については、市町村が専門的知見・ノウハウをもつ法人（経営管理支援法人）を指定し、その法人のサポートを受けられる仕組みで、経営管理支援法人は市町村からの委託等により、「森林所有者からの相談対応、マッチング」、「境界明確化」、「森林所有者の探索」、「森林調査」等を実施します。

また、集約化構想については市町村の一部の地域、特に林業経営に適した森林を対象とし、予め市町村から指定された集約化構想の受け手となる林業経営体（適合事業者）をはじめ、当該地域内の森林の森林所有者や木材関連事業者等による協議の場を設け、路網配置計画や経営管理の方針等を決定するものです。

上記を経て定められた集約化構想を市町村が公告し、従来は長期間を要していた林業経営体への権利設定が（権利集積配分一括計画の作成により）短縮される、共有林について持分の1/2以上の同意を取得すれば間伐等が実施可能となる、権利集積配分一括計画に定められた所有権移転については登記の特例を受けることができる等の特例措置を受けられることで、更なる森林の集約化が期待されます。

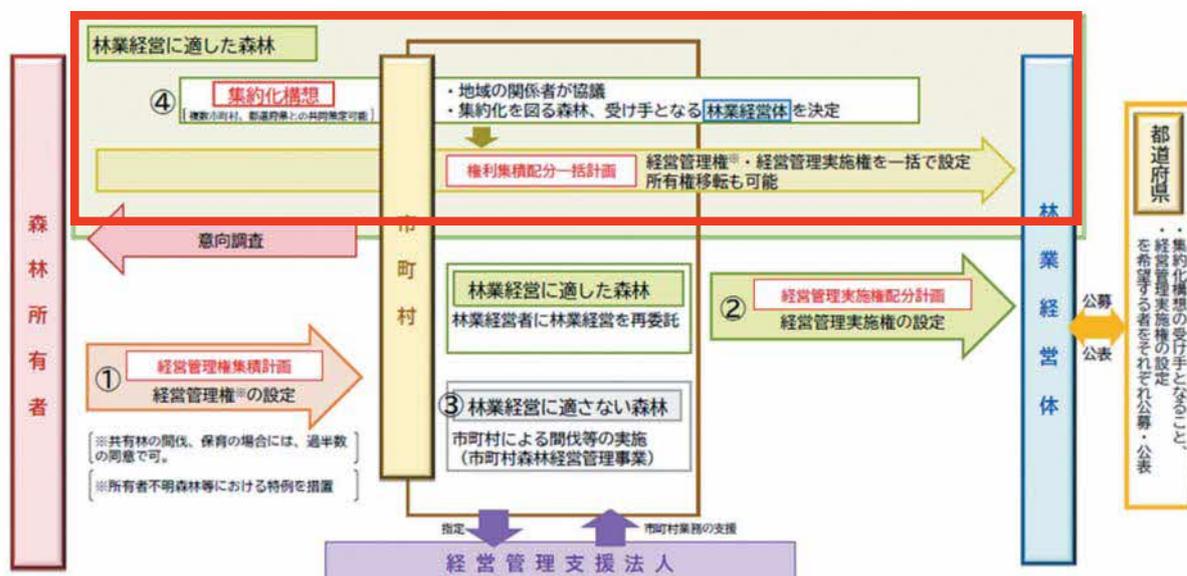
3 今後に向けて

改正森林経営管理法の施行日は令和8年4月1日となっており、現在、国において施行令や施行規則、運用通知等の作成が進められているところです。

県としましてはこれらの国の動きを注視しつつ、法律施行後の制度運用がスムーズに進み、更なる森林の集約化が図られるよう、引き続き市町村に対して周知・助言等を行っていくとともに、次年度以降の市町村への支援体制を構築すること等を通じ、将来に向けた木材の安定供給に寄与して参ります。

(参考) 改正森林経営管理法（森林経営管理制度）の概要

- ① 森林所有者自らが森林の経営管理をできない場合に、意向調査に基づき、市町村が森林の経営管理の委託を受ける。
- ② 林業経営に適した森林は、林業経営者に再委託。
- ③ 林業経営に適していない森林は、市町村が管理を実施。
- ④ また、地域の関係者の協議により集約化構想を作成し、林業経営体への権利設定を迅速に行う仕組みも措置。



※ 部分が今回改正部分

〔森林整備課〕

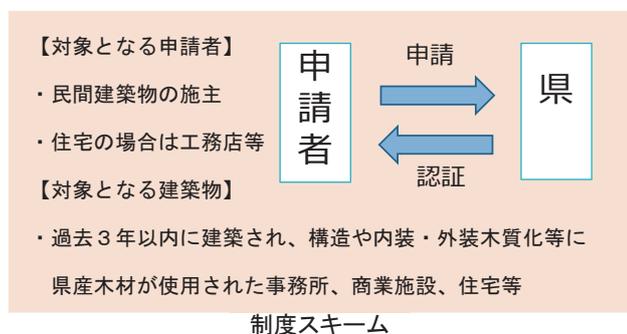
「くまもと県産木材炭素貯蔵量認証制度」の創設 ～木材利用の効果の『見える化』～

森林には二酸化炭素を吸収・固定する働きがあり、森林から生産された木材を建築物に利用することで、長期間にわたり炭素として木材に貯蔵され、脱炭素社会の実現に貢献することができます。

県では、木材の炭素貯蔵量を『見える化』することで、脱炭素に貢献した企業のPRや、民間建築物における木材利用を後押しするため、令和7年5月に「くまもと県産木材炭素貯蔵量認証制度」を創設しました。

建築物に使用された県産木材について、県が、国のガイドラインに基づき、炭素貯蔵量を算出し、建築物の施主や工務店等に認証書を交付、県HP等で公表するとともに、認証を受けた企業を「デカボナ木業（きぎょう）」と称しPRさせていただきます。

この「デカボナ木業」の「デカボナ」とは、英語で脱炭素を表す「Decarbonization（デカボナイゼーション）」を略したもので、「木業」は、カンパニーとしての「企業」に、木材の「木」を充てた造語であり、木材を使用することで、脱炭素社会の実現に貢献する企業をあらわしています。



デカボナ木業ロゴマーク



認証事例：肥後銀行合志支店

令和7年11月には、木村知事出席のもと最初の認証書交付式を開催し、県産木材をふんだんに使用し建築物を新築された4つの企業に対し、デカボナ木業として合計299 t-CO₂の炭素貯蔵量を認証し、木製の認証書を贈呈しました。

本制度に取り組むことで、脱炭素に貢献した証として対外的なPR、企業イメージの向上につながります。

また、認証された炭素貯蔵量は熊本県地球温暖化防止に関する条例のオフセットに活用できるほか、熊本県SDGs登録制度の取り組み実績としても活用できます。



認証書交付式(令和7年11月)

No.	申請者	対象物件	木材使用量 (うち県産木材) m ³	炭素貯蔵量 (うち県産木材) t-CO ₂	【木材利用の効果】 炭素貯蔵量一世帯当たりの CO ₂ 排出量
1	有限会社ソフトシンク	事務所	22.73 (22.51)	13.9 (13.8)	約4年分
2	肥後木材株式会社	工場	250.37 (249.84)	181.7 (181.2)	約49年分
3	株式会社技建日本	事務所	71.65 (66.90)	45.1 (41.2)	約12年分
4	株式会社肥後銀行	商業施設	95.8 (95.80)	58.1 (58.1)	約16年分
4件			440.54 (435.05)	298.8 (294.3)	約81年分

認証施設一覧(令和8年3月)

本制度を通じて、脱炭素社会への貢献を『見える化』することにより、民間建築物での木材利用を促進に取り組んで参ります。県HPにも制度概要や認証実績等を掲載しています。多くの方々からの申請をお待ちしていますので、本制度に関心のある方は、林業振興課くまもと木材利活用推進班まで御連絡ください。



【熊本県HP】くまもと県産木材炭素貯蔵量認証制度 <https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/92/242827.html>



第72回全国乾椎茸品評会

熊本県から43年ぶりに農林水産大臣賞受賞！

昨年度の第71回開催時は、38年ぶりに2名が林野庁長官賞を受賞するという歴史的快挙を本誌面にてお届けしましたが、本年度は43年ぶりの農林水産大臣賞受賞、さらには林野庁長官賞2名受賞、そして熊本県として団体賞第3位を受賞しました。また、同時開催された、森喜作賞授賞式では、熊本県椎茸農業協同組合の城組合長が本県初受賞されました。令和7年8月6日、東京都で行われた表彰式の開会挨拶では、熊本県の乾しいたけ生産の勢いが特に素晴らしいとの発言があり、会場を見回しても一際若さの目立つ石原敬さんが受賞者を代表して謝辞を述べられた姿がとても印象的でした。

【農林水産大臣賞】

- ◆個人賞の部：どんこ
石原 敬 氏（菊池市）

【林野庁長官賞】

- ◆個人賞の部：どんこ
石原 裕 氏（菊池市）
- ◆個人賞の部：香信
落合 龍見 氏（多良木町）



石原さんご夫妻



落合さんご夫妻

女性担い手の活動 ～くまもと林業大学校卒業生の活躍～

技能競技会で1位・3位に入賞

令和7年9月8日に五木村で開催された、第24回林業技能競技会における伐倒・玉伐り競技で、くまもと林業大学校の卒業生である、宇佐川紫織さん（第3期生）が第1位、本田紗央里さん（第6期生）が第3位に入賞しました。2人は現在、菊池森林組合の同じ作業班で、森林整備作業に従事しており、宇佐川さんは主にフォワーダの機械操作、本田さんは主にチェーンソーでの伐倒作業を担当しています。



本田さん（左）と宇佐川さん（右）

（本田さんから宇佐川さんへ）
分からないことを
何でも教えてください
頼りにしています！



（宇佐川さんから本田さんへ）
これからも楽しく続けて
いってください！



宇佐川さんは、班の中で初めての後輩である本田さんに対し、間違っただけを教えていないか、自問自答する日々とのこと。そんな宇佐川さんを本田さんはとても頼りにしているそうです。

また、班長や他の先輩職員も、けがをせず楽しく頑張ってもらいたいと、2人を見守ります。和気あいあいと仕事しながら、日々技術向上のため研さんに励む2人です。

〔林業振興課〕

「くまもと森林フェスティバル」を開催しました！

令和7年11月15日（土）と翌16日（日）の2日間、熊本市の花畑広場及び熊本城ホールにおいて、「くまもと森林フェスティバル～豊かな森林の未来を築こう～」と銘打ち、県民共通の財産である森林をみんなで守り、育てる機運を高めることを目的としたイベントを開催しました。

このイベントは、これまで県が開催していた3つのイベント「林業担い手の元気づくり大会」「くまもと森づくり活動の日」「森林吸収量認証書交付式」を統合するとともに、今年度新たに創設した「くまもと県産材炭素貯蔵量認証制度」の認証書交付式を加えた初の試みとして、くまもと森林フェスティバル実行委員会※1が主催となって開催したものです。

また、毎年この時期に開催されている「くまもと花博」（主催：くまもと花博実行委員会）とオープニングイベントを合同で開催し、熊本市内をはじめ県内外各地からたくさんの方の来場があり、大盛況のイベントとなりました。

※1 くまもと森林フェスティバル実行委員会
熊本県及び県内の森林・林業・木材産業・緑化関係団体から構成

1 「くまもと森林フェスティバル」 & 「くまもと花博2025」オープニング

くまもと森林フェスティバル実行委員会から竹内副知事、また、くまもと花博実行委員会から熊本市の大西市長のあいさつでフェスティバルが開幕。

竹内副知事は「県民の皆様が花や緑、森林に親しみを持つことで、今後『県民参加の森づくり』などが、一層推進されることを期待しております。」とあいさつされました。

2 第24回林業技能競技会表彰式について

第24回林業技能競技会は県内で活躍する林業従事者が、伐倒や玉切り、林業機械の操作技術を高めるための競技として令和7年9月8日に五木村で開催されたもので、その大会で優秀な成績を収めた6名の方々へ竹内副知事などから表彰状が授与されました。

3 ステージイベントについて

林業技能競技会表彰式のほか、右のような催しを開催し、林業研究グループ連絡協議会の國武会長をはじめ会員の方々がユニークな仕掛けでステージを盛り上げ、来場されたお客様を楽しませました。



広報のメインデザイン



森林フェスティバル会場（花畑広場）



林業技能競技会表彰式





チェーンソーライブ



平坂寛トークショー



腕相撲バトル

4 ブースについて

森林・林業・木材産業の関係者や緑化関係団体、林業高校など、47団体が会場内にブースを構え、来場されたお客様をもてなし、何れのブースも大盛況でした。



会場内のブースと来場者の状況

5 基調講演及び認証書交付式について

16日は会場を熊本城ホールに移し、小国町役場の長谷部氏及び株式会社明和不動産取締役会長の川口氏から「パートナーシップの強化で実現地域の森づくりと脱炭素社会」と題して講演をいただきました。

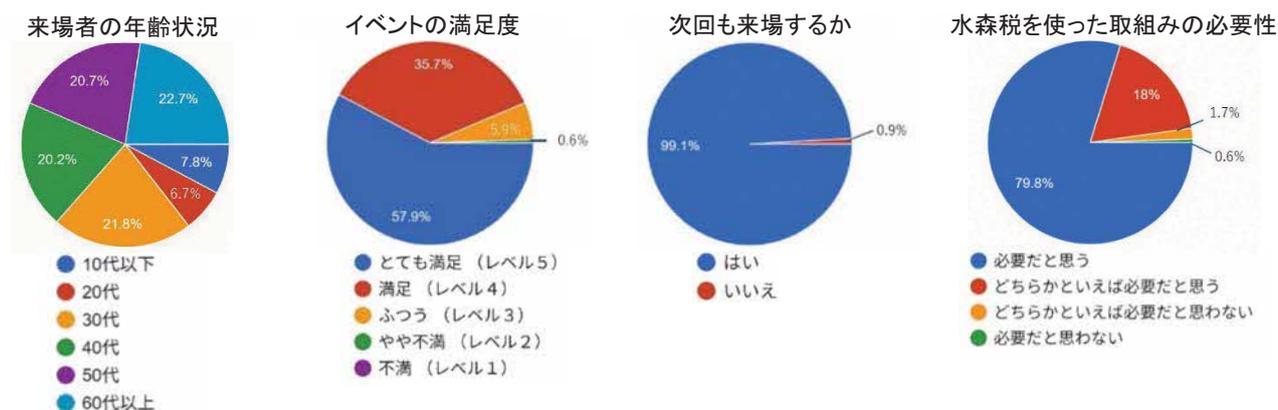
また、基調講演の後は「熊本県森林吸収量認証書交付式」並びに「くまもと県産木材貯蔵量認証書交付式」を行いました。



くまもと県産木材貯蔵量認証書交付式

6 来場者について

このイベントに県内外から約3万4千人の方々に来場いただきました。また、来場された方々には当該イベントや水とみどりの森づくり税に関するアンケートにお答えいただきました。



7 最後に

今回、初の試みとして熊本市の中心街で大々的に実施したイベントでしたが、予想を遥かに超える多くの方に会場に訪れていただき、楽しみながら森林や木材また林業・木材産業の魅力を感じていただくことができたのではないかと思います。

森林の役割の大切さや林業の魅力、また木材を使うことの意義について、県民の皆様に関心と理解を深めていただけるよう、このようなイベントを継続して実施していきたいと思っております。

〔森林保全課〕

本県9年ぶり、6人目の受賞！

～全国林業試験研究機関協議会 第38回研究功績賞受賞～

1 研究功績賞とは

昭和63年から続くこの表彰は、地域における森林・林業及び木材産業に関わる研究に顕著な業績をあげた職員並びに技術の普及に功労のあった職員に対して行われるものです。

2 今回の受賞について

令和7年度は全国で9名受賞の中、当センターの草野育林環境部長が選ばれました。

表彰式は令和8年1月15日、東京大学弥生講堂で開催された「第59回森林・林業シンポジウム」の会場で行われました。

3 受賞者情報

受賞した研究課題名は「スギ在来品種の特性・普及に関する研究」です。この研究に取り組んだ草野部長は、在来品種「シャカイン」から選抜された精英樹で、まっすぐ育ち形状が良く、花粉の少ない品種としても認められている「県下益城1号」の研究に長年携わってきました。

こうした取り組みが評価され、約13年間にわたり継続して行ってきたスギに関する研究が今回の受賞につながりました。

本表彰で熊本県の研究者が受賞するのは9年ぶりで、今回が6人目となります。



表彰式の様子



草野育林環境部長

4 参考情報 これまでの研究功績賞受賞者一覧

受賞年度	研究課題名	受賞者名
平成3年度	松の枯損防止技術に関する総合研究	久保園 正治
平成10年度	ヒノキカワモグリガの生態と防除に関する研究	宮島 淳二
平成13年度	スギ心持ち角材の乾燥技術開発	池田 元吉
平成20年度	県産スギ材の建築材料としての利用に関する研究と普及活動	荒木 博章
平成28年度	広葉樹（センダン）の育成に関する研究	横尾 謙一郎

■ 編集発行 熊本県林業研究・研修センター

〒860-0862 熊本市中央区黒髪8丁目222-2

代表（総務課）TEL 096-339-2221

企画研修部 TEL 096-339-2222

育林環境部 TEL 096-339-2241

林産加工部 TEL 096-339-2242

■ 発行日 令和8年（2026年）3月



発行者：熊本県
所 属：林業研究・研修センター
発行年度：令和7年度（2025年度）